

小宮神社獅子舞のしおり



小宮神社笛の会

【はじめに】

秋分の日に小宮神社に奉納する獅子舞は、大正12年の関東大震災と昭和20年の敗戦の年に中止した以外は途絶えることなく続けられています。また、16通りある獅子舞の演目も18通りある棒使いの演目も一つも欠けることなく今日まで継承されていることは、私たちの宝であり、獅子舞に携わった諸先輩の方々に深く敬意を表する所です。祭りは人を引き込む不思議な魅力を持っていますがこれを伝承していくには並大抵ではありません。

ここに、小宮神社の獅子舞の内容について紹介し、獅子舞を愛する方々が多くなり、保存継承の一助となれば幸いです

【昔のこと】

伊邪那岐命（イザナギノミコト）を祭神とする鎮守小宮神社では、例年、秋の祭礼に際して獅子舞を奉納しています。五穀豊穰、厄払いを祈願するとされる獅子舞は、300有余年の伝統があるとされるがそれを実証する古文書類は、残念ながら今日に伝わっていません。ただ、いくつか獅子に使う道具の中に、年号の墨跡があります。



・昭和52年頃、獅子の太鼓の紐を修理した時、胴内に「元文三年（1738）戊年文月吉日」また、文政八年（1825）修理、安永二年（1773）張替の記載。

・獅子を納める桐箱には、「天保六年未八月（1835）」の文字があり。

・古い大太鼓の胴内には、「弘化三年（1846）」とある。

・郷土誌「武蔵名勝図会（文政三年、（1820））」の「小宮明神」に「例祭九月廿五日 大般若経転読。獅子舞の態をなす。」とあります。



先の元文3年は、寛文年間の火災から70年ぶりに再興された「大行寺」の建立にあたる。大行寺の再興とともに獅子も太鼓も新しく作り替えたのだろうか。

獅子などの道具類を納める蔵は、明治維新の頃までは、小宮神社の別当であった大行寺にあったとされる。当時の神仏分離の考えから獅子具は寺から切り離されて神社に移された。現在納めている蔵は、鳥居の西にある。武蔵名勝図会には、お祭りの日に大般若経が転読され獅子を舞ったとあり神仏習合としてのお祭りを行っていた。大般若経の転読は大行寺で行ったであろう。この本は、名著であるのでここらでは、当時でも知られたお祭りであったことがうかがえる。

祭日の25日は、昭和48年頃に、秋分の日（23日）に変更されるまで変わらなかった。

【古い獅子頭】

小宮神社には、もう一つ古い獅子頭がある。函獅子と呼ばれ雨乞い獅子に使ったものではないかと言われている。平成20年の例大祭の際に特別展示された。傷みがひどく原形をとどめるのは僅かであるが、頭部に鳥の羽根を刺したと思われる孔、額には宝珠飾りを刺したと見える孔がある。

小宮神社では、この獅子頭を使い雨乞いの神事をした。雨乞いの方法は、平井川上流の（旧）日の出村の樽久保の白岩という滝壺から水を貰ってきた。水貰いには年番が行った。雨乞いの場所は、代田橋や御堂会館付近だった。神主が祝詞を唱えながら水を撒き散らし、そこに獅子が舞うと必ずや雨が降ってきた。この雨乞いは、霊験あらたかで評判だったと伝わる。最後の雨乞いの神事は、昭和25年10月に代田橋のたもとで行い、この時も雨になって全員びしょ濡れになったという。



【衣装・道具】

・万灯は、頂に伊勢の二見ヶ浦の夫婦岩と朝日を模した作り物。根本から竹ヒゴに紅白の造花を垂らし、行燈には「鎮守祭礼」「天下泰平」「家内安全」「五穀豊穰」と墨書がある。重いのでそれなりの人でないと担げない。舞庭に飾りお祭りの雰囲気盛り上げてくれる。

・棒使いは、「ボーツケー」とも呼ばれ、頭は豆絞りの手拭を向こう鉢巻にしめる。下はたっつけ袴はかまに草鞋わらじを結び、上は単の着物を、袖を背にまとめて襷たすきをかける。腰に太刀、手に棒を持つ。このとき襷は赤色と青色を用いて二人一組とする。赤色を太刀、青色の人を棒と呼ぶ。腰には木刀、手には六尺の檜の棒を持つ。棒は道中においては地面に突いてはいけないとされる。棒の両面は五色の飾り花房があつて、休むときは足の甲にのせる。

・大頭だいがしらは額に小さな金色の宝剣を立て、金黒赤のねじれた2本の角がある。顔は黒塗り眉、耳歯は金色。小頭しょうかしらは赤黒金色に塗り分けた八角形の2本の角を持つ。雌獅子は額に朱の宝珠。雄と同じ白い睫まつげを垂らし五色の幣紙を飾り、タテガミは習字紙の半紙をシデに切った



ものを覆う。睫はチベット高地に住むウシ科の「ヤク」という毛を使い、頭には東天紅の羽根をさしている。獅子頭にたれる水引は麻に岩場に咲く牡丹の花を染めた柄物。上衣は腰きり襦袢で三つ巴紋を散らした筒袖、下は牡丹唐草文様に素足で、新稽古は黒足袋で鞋

を履く。

・獅子に付ける太鼓は、平成8年松山の尾作益男氏が製作寄贈され2組になった。稽古やお祭りがより効率的に運営されるようになった。小頭の古い太鼓には三つ巴紋がある。

・花笠は六角形の中央に櫛をたて、まわりに五本の造花を飾る。水引は紫の薄物。上衣は女の衣装である。古くは振袖を着たという。



手に竹で作った「ササラ」を持って笛、太鼓に合わせて音を出す。根元は花房を飾る。

・竿は7メートルの竹竿に金銀の色紙を巻き、8枚のシデを垂らす。竿掛りの採り物に使う。

・大太鼓は^{おおどう}大胴と呼ばれ小太鼓二人と間合いをとって笛に合わせて敲く。

【ブッコミ】

秋分の日、土手や道端には彼岸花が満開に咲き誇り、萩の花が香しい。昭和30年代までは、9月25日に行われていたが時代の変化に伴い休日に行われるようになった。

このお祭りは、氏子5地区の小宮、羽ケ田、松山、小宮久保、原小宮で組織された小宮神社奉賛会の主催で行われている。

十日間の稽古を経て本日を迎える獅子クルイや棒使いの子どもたち、奉賛会役員、神社総代、各地区の町内会長が小宮神社宮司宅に三々五々集まってきた。出発の時間が近づいてきたので早く来てくださいという意味の「寄せ太鼓」と呼ばれる「ぶっこみ」が吹かれる。年番と呼ばれる準備や世話役の人は、きょう一日忙しい。関係者にお酒を注ぎまわっている。「出のお神酒」と呼ばれ、“無事にお祭りができますように”といただく。

全員が揃い、花火がなって出発となり西の方の参道へと向かう。

「ぶっこみ」は、道中笛で宮司宅から小宮神社まで約30分かけて関係者、演技者などが練り歩くことである。万灯を先頭に、宮司、奉賛会長、神社総代、町内会長、棒使い、獅子、花笠、竿持ち、太鼓、笛と続く。

道中、笛太鼓の合間に、「ア、コオリヤ、コオリヤ」「ア、ヨオーイ、ヨオーイ」と掛け声をかける。

地口提燈に導かれて参道に入る。途中に「トーヒヒヤヒヤラ」の道中笛を入れ、最後の「ブッコミ」笛で鳥居に着いたら「追い出し」

の笛に変わり、万灯を先頭に棒使いが階段を駆け上がる。広い境内の中に、3間半、4間の四方に注連縄を張った舞庭の奥には、金色の太陽を頂く万灯が飾り置かれる。



笛、太鼓が止むと最初に「場取り」という棒の演技を行う。力強く打ち合うことによって舞庭は邪気が抜かれ、清められるという。「場取りのシマイ」が終わるといよいよ獅子の始まりでる。

【演目】

小宮神社の獅子舞は、「門前の獅子」とも呼ばれ、雄獅子2匹、雌獅子1匹の3匹一組。習字の紙を大量につけてタテガミに見たてることを特徴としている。



剣術と棒術を様式化した「棒使い」、女の子の冠する「花笠」が三位一体となり篠笛にのって狂う。

獅子舞は、おおむね9歳から18歳までの子どもが3人一組となって、5組の子どもたちが16通りの獅子舞を演じる。一年おきに3人が入門する。そして彼らは10年間、毎年狂い続ける。入門したばかりの3人は、「新稽古」と呼ばれ重要な位置づけだ。この小さな子に限っては、獅子頭を被る他に背中に幣束を一本ずつ差して狂う。幣束は神の依り代である。獅子の幣束は、そこに神が乗り移ることを表している。獅子に舞い降りた神は、人々の前で狂う。その姿は神そのものである。この幣束がだんだん派手になった結果、今の獅子のタテガミの形になったのだろうか。長い間獅子は、家督を継ぐ長男が狂うものとされ、伝承に重きを置いた厳しい決まりであった。また、獅子は、舞うとか踊るとか言わず「狂う」という。

西多摩地区にある数ある獅子舞の中で「棒使い」を演じているところは少ない。多分に地域的要因があるものと思われます。一般には棒使い（あるいはボーツケーとも呼ぶ）を含めて獅子舞と呼んでいるが剣術と槍術を様式化した武芸である故に、礼を重んじ颯爽と登場して「ヤァー、トゥ・トゥ・トゥ」と気合と掛け声、うなる棒と棒との激し打ち合い、空を切る技の妙技は獅子とは対極をなすものです。静と動、農民と武士、などにたとえるのでしょうか。



なぜ獅子舞と一緒に演ずるのか、いつごろからそうになったかは明らかではないが、旧秋川市には、尾崎、二宮、油平に天然理心流の道場があり、そこで剣術を学んだものがこの地に多くいたといわれている。武術を学ぶ人の話では、天然理心流の型の原型が色濃く残っているといわれています。丁度江戸後期のその時代は近代国家への兆候が見えてはじめて、社会の変化と共にある時期に、武芸化され祭礼と結びつき、獅子舞と一体となったものと思われます。

「獅子舞演目」

- ・ トーロヒャリー
- ・ オフフ
- ・ オカザキ
- ・ ミコ
- ・ 四つ花
- ・ トーヒイヒャヒャラ
- ・ ショウデン
- ・ クリノキボー
- ・ 中庭の雌獅子隠し
- ・ トーヒーヒャリホ
- ・ 仕舞庭の雌獅子隠し
- ・ 竿掛け
- ・ クルイ
- ・ オオギリ
- ・ 太刀掛け
- ・ 追い出し

「棒使い演目」

- ・ 場取り
- ・ 場取りのしまい
- ・ 巡礼棒
- ・ 腰車
- ・ ウラミ
- ・ オモテクズシ
- ・ 巡礼クズシ
- ・ 腰車クズシ
- ・ 水引
- ・ サンカクズシ
- ・ ミトリ
- ・ バートルヤツ
- ・ 鶴の一足
- ・ 返し棒
- ・ 影
- ・ 表

棒使いは、獅子舞の一演目ごと交互に二演目ないし三演目行う。そして最後に必ず、返し棒が演ぜられてその庭が終わる。それは常に礼に始まり、礼に終わる



太刀掛りの演技

獅子と棒使いの激しい闘い

獅子の内容について以下、簡単に説明すると

<トーロヒャリ>

最初の庭の狂い出しの獅子で「新稽古」が狂う。獅子の動作の基本をなすもので狂う形の
みならず太鼓の打ち方、獅子の文句を正確に覚えることが重要である。大頭、雌獅子、



小頭の順にしゃがんで並び、笛の三小節目で立ち上がり狂い出す。重い獅子頭と太鼓をつけて、ヨチヨチ歩きの獅子がひと回りするのがやっとである。

<オフフ>

幼い獅子がお母さんの背中で子守唄を聞きながら寝かされている様な獅子。前奏二小節目の終わりに庭の中央付近に出て狂う。

<オカザキ>

最初の庭の最後の演目で、愛知県岡崎で江戸時代の「岡崎女郎衆」というはやり歌が獅子舞と結びついたものといわれています。「オカザキ」の笛の文句の一部に「オオカザキ ジョンジョロウシュマシイイズタレタヨナ」という表現がある。これを「お岡崎はジョン女郎衆まあしいず垂れたよな」と表現するとおもしろい。前方に行ったり、戻ったりする狂いである。

<追い出し>

最後の演目が終わると、直ぐに「追い出し」の笛に変わり、獅子は四隅で厄払いの所作を行いその庭が終わる。

<ミコ>

入門して3～4年の狂い出しの獅子。体もだいぶシッカリしてきた。四隅をまわり、お辞儀をして飛び跳ねるところが特徴。

<四つ花>

4人の花笠のまわりを蝶が花にたわむれているように、そして嬉しそうに狂う、とてもきれいな獅子です。他の地区では、花掛かりと呼ばれているところがある。

<トーヒィヒャヒャラ>

庭の最後の演目。オカザキと同様、前方に行ったり、戻ったりする狂いである。

<ショウデン>

入門して5年以降の狂い出しの獅子。舞の美しさ随一と言われている。足の運び、体のこなし、首の振り方によってどう獅子らしく表現できるか見せ所です。その足運びは、田植えの姿勢を模して日本の稲作文化をここにあらわれているのだという人がいた。

<クリノキボー>

花笠の周りをまわるのは、四つ花と同じであるが、蛙飛びでまわる。中央の花笠に三匹が並んで回った後、獅子はおじぎをして放射線状に動き、笛は「スガガキ」に変わる。獅子の文句に「クリノキボー」に「カキノキボー」という表現がある。実りの秋の収穫の喜びを表しているのだろうか。

<中庭の雌獅子隠し・仕舞庭の雌獅子隠し>

獅子舞を別の角度から見ると、人間社会の成長過程を表したものと言われている。獅子も次第に大きくなり、思春期から青年期に入り恋をするようになる。花笠に隠れている一匹の雌獅子を二匹の雄獅子が取り合うもので、激しく奪い合う喧嘩の姿、隙があるか様子を見る姿、そうはさせずと追い込む姿など、取り合いの様子が表現されている。最後は、仲直りして終わる。中庭も仕舞庭も通りは同じであるが、仕舞庭の方が「クリノキボー」の笛で力強い狂いである。唄が三つ入る



<トーヒィヒャリホ>

庭の最後の演目、小走りに前方奥まで進み、左右に狂いお辞儀をして蛙飛びをしながら戻ってくる。次の前方へはオカザキの足の運びで進み繰り返す。

<竿掛り>

この獅子は、金銀に巻かれた竿の向こうにいる雌獅子を二匹の雄獅子が取り合うものです。二匹の雄獅子がこちら側で探し回り、竿沿いに行ったり来たりしている。やがてその竿を取り除こうと、手や足、頭を使って、そして歯で噛み取ろうとする。隙を見て、大頭が竿の中に入る。小頭も入って雄同士の喧嘩が起こる。小頭が追い出される。再度、挑もうとすると竿は解かれ、3頭が仲直りをして楽しく狂って終わる。

<クルイ>

竿掛りの庭の最後の演目で、前方に行ったり戻ったりする狂いであるが、最初は雌獅子隠しの狂いで唄が入る。前方へ小走りして向こうまで3回飛び跳ねる。うさぎ跳びをして戻ったり、後ろ向きに足を交互にあげながら戻ったりする。最後は、「オカザキ」のふえで狂う。

<オオギリ>

今までの軽快な4拍子のリズムから一転して、ゆっくりとした幻想的、神秘的な笛の音に変わる。獅子は三方へと散り、ゆっくりと左、中、右と上下動を繰り返し、そして両手で大きくあおる。これはあたかも「風を起こし、雲が沸き、雨を降らせる」そんな表現しているのか。後半は、4拍子にのって3頭が中央で軽快に狂う。それは、実りの秋を迎え収穫の喜びを表しているようです。なお、オオギリ（大切に）とは、その日演ずる最後のだしものという意味であるが「太刀掛け」の前に行っている。

<太刀掛け>

太刀掛けでは、狂う前に「お清め」と言って棒使いによって塩がまかれる。棒使いの持つ太刀を奪い取ろうとする獅子とそうはさせないとする棒使いとの闘いである。最初は、棒使いが扇子をなびかせて獅子を誘い出す。太刀に手が触ると獅子は次第に荒々しくなまって棒使いに詰め寄る。やがて腰の太刀を抜きはなす。2頭の雄獅子は、手を切られ、足を切られても懸命に太刀を奪い取ろうとする。そして最後に太刀を奪い取る。雌獅子も棒使いを圧倒し、転車になって勝ち誇る。2頭の雄獅子は口に太刀をくわえ「ショウデン」の笛で意気揚々と練り歩き、太刀を納めてお祭りが終わる。

獅子舞の演目（曲目）の名は、「トーロヒヤリ」などのように笛のしらべ（文句）の第1句から採られているもの、竿や太刀を相手に狂うことを「掛け」といっているがそこから採ったもの。雌獅子隠しのように演劇的要素から採られているものがある。

<雌獅子隠し> の唄

あめのおにわへあさざりがおりて　そこでめじしをかくしたよな　そこでめじしをかくしたよな

なにかめじしをかくたよな　いわをくだいてめじしたずねる　いわをくだいてめじしたずねる

めじしおじしがかたなおられる　めじしおじしがかたなおられる

（中庭、仕舞庭とも共通）

<クルイ> の唄

あめがふりそでくもがたつ おいとまもうしていざかいさいな おいとまもうしていざかいさいな

獅子舞の唄は、昔は沢山あったらしいとされている。唄は長老が極めて静かに唄い、笛やササラの音が入るので聞き取りにくく忘失してしまったのだろうか。ただ、現在ある唄は、唄い始めや終わりが獅子の狂い動作に関係しているので重要な位置付けである。

<千秋楽>の儀

夜の部、太刀掛りが終わると祭りに使った道具類を舞庭の中央に集め、会長の音頭で千秋楽を謡い七つ締めをして祭りは終了する。

千秋楽の謡の文句は

千秋楽には 民を撫で 万歳楽には 命を延ぶ 相生の松風 颯颯の声を楽しむ 颯颯の声を楽しむ

(意味)

能の「高砂」の終わりにある文句で

千秋楽（雅楽の曲名）を奏しては民の繁栄を、万歳楽（舞楽の名）を舞っては君の長寿を祈る。そうした相生の神松の祝福に、松風の音までが平和な御世を楽しんでいるようだ。

(平成 28 年秋 文責 田中良作)

本稿を草するにあたり下記資料を引用させていただいた。付記を以って感謝の意を表します。

- ・秋川市史
- ・秋川市・多西郷土精史
- ・武蔵名勝図会
- ・季刊 ORU NO、11 1995

- ・川崎 実 かわせみ通信 獅子舞の風土記シリーズ <小宮神社の獅子舞>
- ・小宮神社奉賛会 獅子の笛のモンク
- ・小宮神社笛の会ホームページ
- ・尾作 益男 獅子関連写真、棒使い関連資料
- ・岩波書店 日本古典文学大系